



会員 各位殿

平成27年9月01日

巻頭言

NPOソフトインダストリー研究会  
理事長 白石 嘉宏

## 物差し

このところ色々な問題が起こっています。国立競技場が白紙からの出直し、エンブレムのパクリ疑惑、議員の不適切な発言や未公開株をネタにしての集金など次々と、国のあり方を決める人達がどうしてこんなにまで劣化してしまったのでしょうか。

グローバル化ということで企業の会計はアメリカ方式に従うことになりました。アメリカ方式は株主第一主義です。物言う株主の監視の目の中で収益をあげられなければ株主総会で選任された取締役はすぐに首になります。その代わり利益を上げればその利益の中から多額の報酬を得ることが出来ます。

利益を上げるには無駄なものは取り除き身軽にしたほうが資本の収益率は高くなります。だから、直接には収益に寄与しないと思われる社宅、保養所、グラウンドなどは切り捨てられます。はなはだしきは自社のビルまで売り賃貸物件に入ります。身軽になるからです。

この会計方式になる前、良い会社、安定している会社と言うのは含み資産を一杯持っている会社でした。決算時に赤字が予想されるなら保養所を売り株主への配当金確保と社員への賞与を担保するというで常に安定した経営をしてきました。資本を出してくれた株主には常にある程度の配当をすることと言うことで理解を得る、社員を採用すると数年ごとに各部署を担当させ社内教育を行い勤務年数が増えるに従い会社の全体像がわかるように仕立ててゆく。会社がおかれて居る地域・自治体とは良好な関係を築き維持する、製品を買ってくれる先には満足度が上がるように商品の向上に努める。そのバランスにより社会全体と一体感を保つ。株主、社員、地域、顧客とう全体を俯瞰する。単にお金を稼ぐことに長けているから経営者になれるということではありませんでした。

アメリカ方式という物差し、要するにお金を出してやったのだから利益を目一杯上げて株主に配当しろということになると、始めに会社の資産を極力軽くするということを行います。次は社員の数を削れる限り削ります。削りすぎて足りなければ社員よりも安いお金で調達できる派遣社員やアルバイトで補完します。こういうことが出来る人が良い経営者ということになり、その代償として多額の報酬を手にします。

極端な見方をすれば、全てをお金に注力し、それ以外は配慮しないということが出来る人が立派な経営者ということになるのです。このような経済社会が20年にもなると周囲への配慮がなくても、自分の目の前のこと、お金だけの社会になって行きます。

政治家の劣化も目の前しか見てないからではないでしょうか。物差しは大切です。

## SORUCA 通信 contents

- 物差し
- 長寿時代
- 見えない「3本目の矢」 格差社会への道
- セミナー・執筆の稽古場
- 「見たこと、したこと」白石回想録—3



## 長寿時代

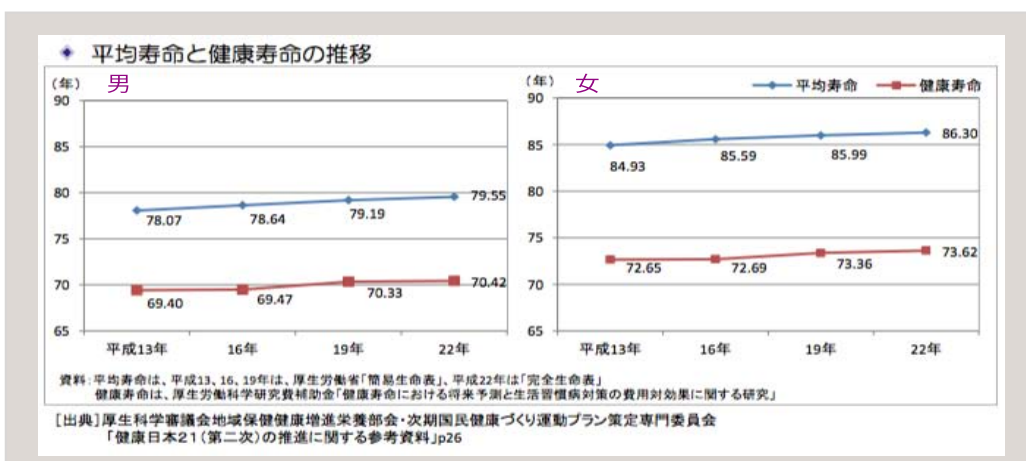
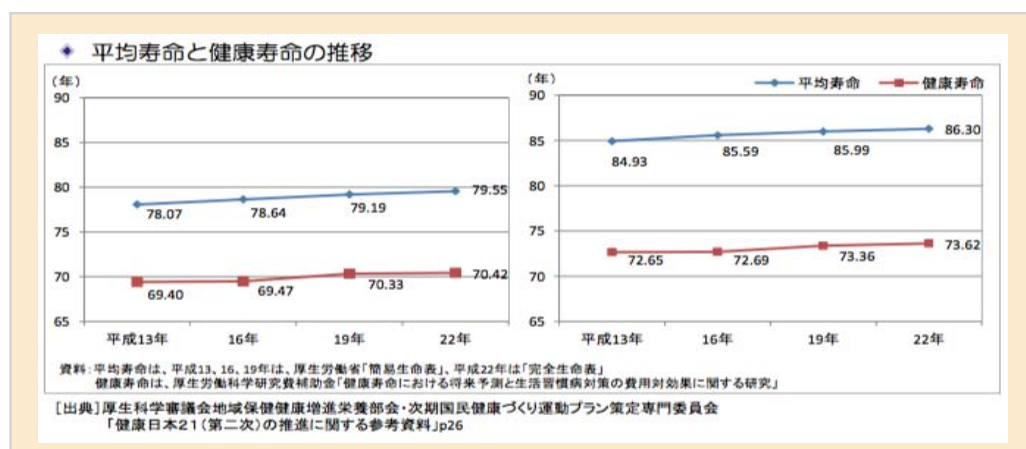
すでに報道に接しご存知かと思いますが7月30日、厚生労働省は平成26年(2014年)時点の簡易生命表を公表しました。女性の平均寿命は3年連続(東日本大震災の時は順位を下げ2位になりました)で世界一位の86,83歳ですから87歳とってよいでしょう。一方男性も世界三位で80,50歳、四捨五入すれば81歳になりました(一位香港、二位アイスランド)。でも現在81歳の男性の平均余命は8,79年ありますから90歳まで保障されていると思ってよいでしょう(87歳の女性の平均余命は7,18年ですから94歳になります。男女の寿命の差は狭まって着ています)。人生は90年時代を迎えたこととなります。

少々古くなりますが平成22年時点の平均寿命と健康寿命の差を見ると、男性では9年、女性では13年弱と言う長い年月になります。

つまり、膝が痛いから杖が、車椅子がという骨や関節に支障があるとか、血圧が高く脳梗塞を患ったとか、糖尿病で透析を受けている。さらには寝たきりで一人では日常生活が送れず介護を受けなければならないなどなど。さまざまですが現状は以下の図の通りです。

皆さん色々とお気付きになると思います。年金、医療費、世帯構成の変化、町の変化、長寿化対応事業などなど。先ずは、老後の年金がどうなるかそのことを見てみましょう。

国民皆年金制度が発足したのは昭和36年(1961年)です。当時の平均寿命は男性66歳、女性71歳でした。そうして人口ピラミッドはまさにその名の通り高齢者が少なく若者が多いピラミッドの形をしていました。それが徐々に崩れて来ました。

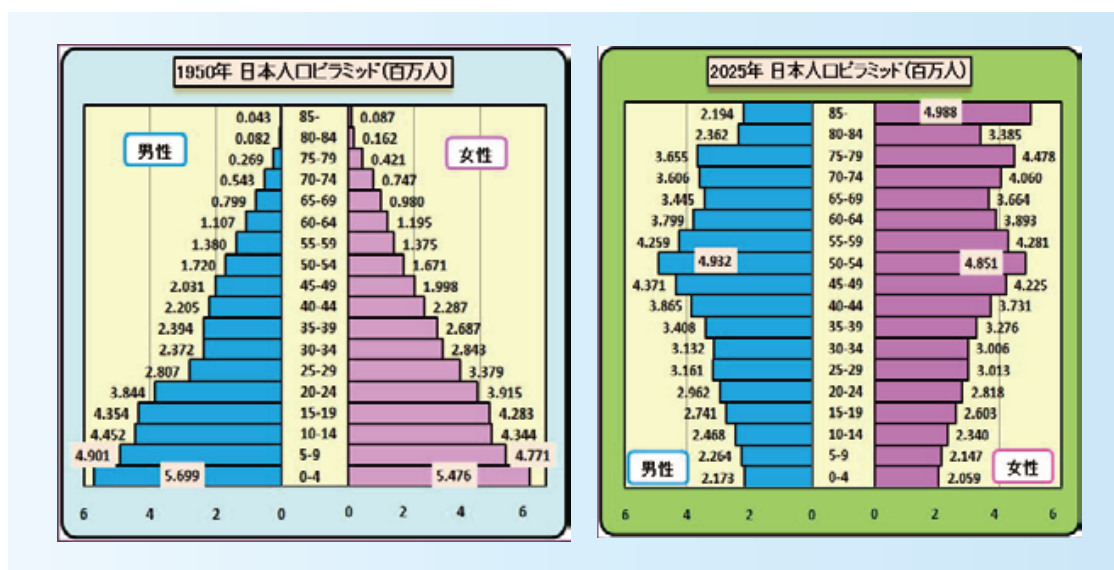


現在の年金の方式は若い人が高齢者の年金を負担するということになっていますが、この制度が維持できなくなることは明らかです。年金の支給が60歳からだったのが今では65歳になってきました。労働力人口の減少も明らかですから元気なうちは働いてもらい年金の支給はやがて70歳からになって行くでしょう。つまり健康寿命の間は働いてもらい、年金負担を軽減するとともに健康寿命を延ばすような支援が必要になってゆきます。

健康な人なら年齢に関係なく働くというのがやがて普通の姿になってゆくでしょう。企業側も雇用と賃金制度の対応が必要になります。

医療費も今のような制度は維持出来なくなるでしょう、すでに毎年税収より多い国債を発行して年度予算を組んでいます。その3分の1は医療関連の社会支出です。笑い話として、病院の待合室で高齢者が「今日はあの人来ないわねー、病気にでもなったのかしら」と友達に話す。加齢に伴い体に変調を来すとその都度薬が追加され、ついには毎食の時に服用する薬のほうがお茶碗の中のご飯より多くなってしまい「先生、これだけ薬を飲んだらお腹一杯になるから、ご飯は食べなくてもよいですか?」というよう話があります。すでにお米の年間売上高2兆円よりもサプリメントの売り上げの方が多くなりました。やがて、薬が主食でサプリメントをおかず、デザートをご飯にするという不思議な長寿国家が出来上がるかも???

日本は長寿国、そして人口減少国家です。何時までも今までの延長線で物事を考えたり制度を維持しようと思っても無理です。わが国は世界が見つめる「実験社会」なのです。いよいよ変化が始まります。



## 見えない「3本目の矢」 格差社会への道

3本の矢を放つという斬新な手法でデフレの日本経済を2015年には2%のインフレ?に持ってゆくという大見得を切った安倍総理、就任早々自ら財政出動と言う第1の矢を放ちました。このお言葉に応じて本来独立した立場に居るはずの立ち居地などお構いなく異次元の緩和を、さらに翌年にはバズーカと呼ばれる2度目の緩和も行った黒田日銀総裁。さすがに効果はてきめんで、8,000円当たり低迷していた株価は2万円を超えるようになったし失業率も改善されました。円は一気に50%も下落し1ドルが120円台の半ばになりました。こうなれば輸出は大幅値引きとなりますから盛大に多量に海外で売れるようになり、先ずは輸出関連企業から業績は上がり、ここが機関車役となりまわりの企業を牽引し、その乗客である国民に恩恵が行き渡る、そうなれば人々の消費意欲は上がり、これに応じて3本目の矢。民間の設備投資も盛んになり経済は活性化しインフレに向かうという筋書きでした。

ところが現実を見れば一目瞭然、民間企業の投資意欲は弱く期待はずれの状態が続いています。なぜでしょうか？

私は昔、「実験社会への突入」と言う本を書きました。そこに込めた想いは今まで経験してきた成功手法がわが国では当てはまらなくなる。ということです。今では各省庁も民間の研究機関も声をそろえて少子高齢化により需要は減衰して経済力が落ちる、消滅自治体が予想される。という予測結果を前に来るべき変化に対応しなければということを表立って表明するようになりました。

今日、経済はグローバル化しています。安くモノを作ること、そのモノを求める人が多くいる所へ持って行き利益を上げることが当たり前になっています。良質で豊富な人が居る、さらに人件費が安い、そこで売れることは元より作った製品が売れる他の国々に輸出も出来るという国には周りじゅうの国の企業が投資をします。日本から見れば始めは韓国、そこでの人件費が上がると次は中国、同様、次はマレーシアやタイ、さらにベトナム、インドネシア、フリッピン、バングラディッシュへ、最後の黄金郷がミャンマーになるのでしょうか。同様なことは当然ヨーロッパでも起きています。ドイツを中心に周辺の人件費の安い南欧の国々、それに続いて東欧の国々が加わります。

円がバーゲンレートになっても日本人の賃金の20分の一の国と比べれば蠅の斧でしかありません。

物の生産とその流通を基とする経済は人口ピラミッドがまさにピラミッド型で若い人が増える国が経済成長をします。一方わが国のように大人が国民の80%を超えるような国では持ち家か賃貸かはともかくすでに家は世帯数を上回り空き家が問題になっています。衣類も流行を追わなければ十分あります。家具家財も同様です。もちろん食糧も同様、前のページに書いたとおり、今日ではお米の購入金額よりサプリメントの金額が上回るようになりました。大手飲料メーカーも同様、本業の飲料よりもサプリメントの売り上げの方が多くなりました。

話を始めに戻します。放たれた2本の矢は誰がその恩恵に預かったのでしょうか。すでに十分な資金を持っている、信用があるので金融機関が融資してくれる、という人たちは貴金属や高級車などモノ消費も確かに行いますが彼らは為替取引、株式や不動産などに投資してさらに豊かになってゆきます。一方その恩恵にあずかれない圧倒的に多くの人々は円安により全ての生活関連用品が値上がりしてゆく中で、今まで以上に生活を切り詰めなければならなくなりました。

3本目の矢は放たれません。人々の消費購買意欲はさらに萎縮しています。3本の矢による目論見はすでに果たせなくなっています。今までの経済指標による国力の物差しをこれからも日本に引き続き当てはめてゆく限り日本は国際社会で時間とともに順位を落とし、国内では投資余力を持つ人と日々の暮らしの維持にとらわれている人との格差はさらに広がって行きます。

はっきりしていることは、人が減りモノが十分に行き渡っている国でモノ消費と流通による経済成長を図るということは出来ないということです。

では、何処に新たな成長を求めるのかと言うと、先ずは始末つまり処理処分の技術と制度それに良質な維持方策の開発です。原発を作る技術を持つ国はいくつも有ります。しかしこれを見事に処理する技術を持っている国は有りません。空き家の問題も今の税制度では先に進みません。人も長寿になりましたが、健康寿命を延ばさなければ幸せでは有りません。ちょっと周りを見ればこれから取り組む課題は多々あります。そうしてこれらの課題解決が次のお金だけで計る国力ではなく、新たな指標になってゆきます。

わが国はこれから世界に先駆けて少子高齢化社会に向かいます。今までの経済指標とは別の指標を作ってゆく国にならねばなりません。この国に生まれて良かったという。



## 時代の変遷と土地の姿～今時の社長のお住まいは～

東京への一極集中が加速しています。この流れは産業構成と少子高齢化の両面からのことと思われます。政治家、官僚、スポーツ選手、文化人、芸能人や企業経営者の住み処も時代とともに変わってきました。そこで今回は今時の社長たちが何処に住むようになってきたかを紹介いたします。

東京商工リサーチは、2014年12月時点、全国267万社の中で「社長が多く住む街」をランキングして次の通り発表しています。

1位	東京都「港区赤坂」	2,103人	(前回2012年9月調時点1位)
2位	東京都「渋谷区代々木」	1,777人	(前回2位)
3位	東京都「新宿区西新宿」	1,763人	(前回9位)
4位	東京都「港区南青山」	1,697人	(前回4位)
5位	東京都「港区六本木」	1,679人	(前回5位)
6位	東京都「港区高輪」	1,673人	(前回3位)
7位	東京都「江東区大島」	1,525人	(前回12位)
8位	東京都「新宿区新宿」	1,516人	(前回14位)
9位	東京都「江東区亀戸」	1,508人	(前回11位)
10位	東京都「港区三田」	1,474人	(前回13位)

ここで、2012年に引き続きランキング1位の「港区赤坂」とは、どのような魅力がある街なのでしょう。昔にさかのぼってみましょう。赤坂商店街協議会では赤坂の歴史を次のように表しています。

本格的な始まりは徳川家康の入府に始まります。江戸城の造営に際し、江戸城の西に位置する赤坂台地に紀伊徳川家（現在の赤坂離宮・迎賓館周辺）をはじめ大身の旗本や大名を配置して江戸城西の守りを固めました。低地を流れる川は江戸城外堀として整備し、溜池は一時、江戸の水瓶として利用されていました。その名残が現在も「溜池」の地名として残っています。満々と水をたたえた憩いの場であった溜池には料理屋などができ、これらの料理屋が赤坂の花柳界の始まりだと言われています。江戸城入り口に赤坂見附門が置かれ、門を出たすぐの坂下には幕下藩士、城内で働く職人方や庶民が住み、坂の上の高台は大名や旗本の屋敷町となって、その形が現在にも受け継がれています。

明治時代になると、大名、旗本は国許に帰り、代わりに新政府の役人や京都からの公家たちが大名や旗本屋敷の住人となりました。また、長州毛利藩の中屋敷跡は、陸軍第一連隊（戦後は防衛庁、現在はミッドタウン）となり、松平安藝守の屋敷跡は近衛第三連隊（現在のTBS）となり、軍隊の町となったのです。昭和11年2月26日早朝に起きた2.26事件は赤坂の陸軍第一連隊、第三連隊（現在、国立新美術館）、近衛第三連隊から兵隊が出動しました。赤坂の花柳界が隆盛したのは明治に入ってからのことです。

次回は、明治時代から赤坂がどうして栄えて来たのかをご紹介します。

2015年8月吉日

リプロパティ・ディベロップメント株式会社  
野村明男

### 「見たこと、したこと」白石回想録—3

今では都心に通う人の住宅地になっていますが 昭和20年(1945年)の我孫子は駅の周りと356号線の街道沿いに家が並んでいましたが、その南側手賀沼に向かってゆくと畑が広がり傾斜のきついところは杉と松林になっていました。夏も終わるころ、ものすごい数の赤とんぼの群れが出てきました。赤とんぼの群れの中に飛び込んでゆくと前後左右上下、周りは全部赤とんぼです。空気が乾いてきて朝晩過ごしやすくなるにしたがい蝉は油蝉から蝸(ひぐらし)に変わり冬へと向かいます。冬は雀とりです。わなを器用に作る子供が居ました、私は分け前を期待してもっぱらその子の後についていました。

翌昭和21年は前年より食糧難でした、子供ながらも本当に戦争に負けたと感じたのは奨励されて植えた芋を収穫したときです。多収穫品種でした、今までの芋の倍ほどの大きさが有りました。でも蒸かしてその芋を口に含んだときあまりのまずさに口の中の芋を飲み込んだ後、もう食べるのを止めました。あとで知ったことですがアメリカでは家畜の餌にする品種だったそうです。当時は家畜の餌でもお腹が満たされれば上々という状況だったのです。

この頃になると東京に戻るために我孫子から東京へ頻繁に通うようになりました。列車は食料買出しの人などで何時も満員です。小さかった私は列車の窓から放り込まれ後から乗ってきた母と車内で出会うということが良くありました。千住に近づくと火力発電所のおけ煙突が見えます。1本から4本と列車が進むに従って煙突の本数が変わって見えるのです。上野駅では地下道の中に家のない人と戦争孤児で一杯でした。小便の乾いた臭いとボロをまとい垢で黒光りしている人の中を通り抜けるのが怖かった。今はコレド日本橋になっていますが当時は白木屋デパートです、ここはP X (アメリカ軍の売店)になっていましたが1階から2階にかけてエスカレーターがありこれに乗るのが嬉しくて良く遊びに行きました。この白木屋の向かい側に事務所が出来、東京に出た時はその2階で寝泊りしました。この頃には有楽町の日劇が再開されていて始めてレビューを見ました。華やかな舞台とお姉さんたちが足をむき出しにして踊っているのを見てとても驚きました。

上野動物園は当時生きている動物が少なくその代わりライオンでもトラでも動かない剥製が延々と並んでいました。初めての上野動物園の想いでは動物剥製館です。日がたつにつれ田舎の子供になってゆく私を父は都会で教育しようと暮らすための家を求めました。母の希望は自分が育った牛込です。でも当時の牛込はまだ一面焼け野が原でようよう掘建て小屋散見される状況でした。残っているのはコンクリートの土台、かまど、肥え壺ぐらい。我孫子の田園風景に比べ牛込はバラックと雑草の生い茂る土地でした。



< 編集後記 >

国会では安全保障法案が審議されているが、ある会合で8人の方が順番に安保法案に対する意見を言うことになった。なんと小生以外全員反対の意見であった。テレビのコメンテータが言っているような反対意見であった。自分と同じ考えの人はいるだろうと思っていたので、孤立して、時勢の怖さを味わった。代償のない平和なんて、過去の歴史ではなかったし、そもそも平和とは戦争でない状態を言うのに。

(渡辺 勝範)

SORUCA のホームページの画面です。 <http://sorca.p2.weblife.me/>



「特定非営利活動法人ソフトインダストリー研究会」 広報誌  
SORUCA 通信 (2015年初秋号)

発行責任者 白石 嘉宏  
発行所 NPO ソフトインダストリー研究会  
東京都新宿区矢来町 47 番地  
TEL: 03-3266-1769  
FAX: 03-3266-1764  
<http://sorca.p2.weblife.me/>  
編集人 渡辺 勝範・長谷川 毅  
発行日 2015年9月01日



発行元 :NPO ソフトインダストリー研究会